

\* \* \* \*

1) ヒメハタキゴケは蒴柄が「く」の字状に曲がるので、ハタキゴケ属の新種として書かれたが、基準標本に当たってみると、近縁のススキゴケ属の種で日本各地に産するアカススキゴケと何ら変るところがない。ヨーロッパ産の *Aongstroemia longipes* を基準種とするハタキゴケ属やススキゴケ属、オバナゴケ属については、将来、再検討が望まれるが、現在の属および種を容認する限りではヒメハタキゴケはアカススキゴケの異名となる。

2) 佐藤正己先生により、中国、山西省、娘子関で採集された直立性の蘚は、標本で見ると外観はヤナギゴケ科のササバゴケ属のものと似ている。ササバゴケ属のものは、本来は匍匐性であるが、やや酸性の湿地で束生して水中から立ち上がる性質を持つ。一方、センボンゴケ科の中にはアルカリ性の湿地に生えるものがあるが、これらはもともと直立性の蘚である。同じ湿地という環境の下で、外観は非常に似ている。娘子関のものは後者に属する *Barbula ehrenbergii* である。胞子体を持たない蘚の分類のむづかしさを示した例と言えよう。基準標本について桜井博士は原記載中に 24, 25-typus! と書いておられ、24および25が syntype と考えられないこともないが、ここでは 25-typus と標示が連なっていると解釈して holotype として扱った。

3) アオギスゴケは多型で変異の幅が大きく、貧栄養のキンキヒツジゴケは種としては勿論のこと、変種として区別することも困難である。

4) *Calliergon cordifolium* var. *brachyneuron* Sak. は正式に発表されていない植物名であるが、植物学雑誌や岩月・野口 (1973): *Index Muscorum Japonicarum* にも収録されている。これは明らかにタニゴケと同一であるので、混乱を避けるため本文に記載の通り処理した。

この報文は漢法科学財団の助成によるものであることをしるして感謝の意を表します。

□Hawksworth, D.L., B.C. Sutton & G.C. Ainsworth: **Ainsworth & Bisby's dictionary of the fungi**, 7th ed. 445 pp. 1983. CMI, Kew. ¥6,250. 1943 (昭和18)年の初版以来改版を重ね、今回は見出し語総数16,500として出版された。変形菌類・真菌類・地衣類にわたり、属名および目以上の高次分類群名(科は目の中で取扱われている)、各種菌学用語や菌類に関係ある広範な事項を見出し語とし、簡潔な情報が与えられている。採用されている分類体系では、第6版に比べて特に子囊菌類が大幅に改められており、従来の核菌類や盤菌類という枠が取払われて37目が並記され、自然分類に向けての最近の模索が反映されている。菌類に興味をもつ者には便利で不可欠な本である。

(三浦宏一郎)